

サクラマス

南出喜久治

平成22年11月5日記す

皆さんは、「鱒寿司(ますずし)」を食べたことがありますか。酢めしの上に、味付けした塩漬けのサクラマス(桜鱒)の切り身を乗せ、それを笹で包み、木で作った丸い輪っばの中に入れた独特の弁当です。

これは、富山(越中)神通川を遡ってくるサクラマスを食材にした地元の食文化が生んだ古くからの名産品で、平安時代中期の『延喜式』という法令集にも出てくるものです。江戸時代になると、將軍徳川吉宗に献上された越中神通川の鱒寿司を吉宗が絶賛したことから、現代に伝わる、あの独特の形をした鱒寿司が全国的に広がって有名になりました。

今日の話は、この鱒寿司に使われている「サクラマス」についてです。サクラマスの生態は、未だに分からないことも多く、実に神秘的なものですが、初めに知っておいてほしいことは、このサクラマスは、なんと、川の上流(溪流)にすむ「ヤマメ」と同じ魚(同種)なのだということです。

サクラマスは、山奥にある溪流(谷川)で孵化し(卵がかえって)、その川から海に出て大きく育ち、再びふるさとの川を遡上して(流れをさかのぼって)、そこで産卵して一生を終えます。

しかし、海に出ずに川で一生を過ごすものがあります。それがヤマ

メです。ヤマメは、成長しても三十センチほどの小型の魚です。これに対し、海に出たサクラマスは、その倍以上の七十センチほどになります。同じ魚（種）なのに、育った場所、生態、体の大きさ、色、形も違うのです。

海に出て再び川を遡上するサクラマスを「降海型」と言い、海に出ずに川に留まるヤマメを「河川残留型（陸封型）」と呼びます。

サクラマスの仲間には、サツキマス、ビワマス、タイワンマス、ホンマスなどが居ますが、河川残留型だけのタイワンマス以外は、いずれも「降海型」と「河川残留型（陸封型）」の両方が居ます。たとえば、サツキマス（降海型）とアマゴ（河川残留型）の関係もそうです。

これだけの話なら、単なる初歩的な知識にすぎません。ここからが大事なところですよ。

では、ヤマメ（河川残留型）とサクラマス（降海型）とは、どのようなにして別れるのでしょうか。

それは、種族保存に必要な生存競争によるものです。

サクラマスは、川を遡上して山奥の溪流で産卵します。そして、そこで卵がかえって稚魚になります。魚の習性として、流れに逆らって上流の方を向いて泳ぎます。そこに、川に落ちた小さな昆虫やプランクトンなど、稚魚の餌が上流から流れてきます。稚魚たちは、それに飛びつきます。力の強い稚魚は、どんどん前に出て、その餌を食べますが、力の弱い稚魚は、食べ遅れてどんどんと下流に流され、ついには海に出てしまいます。力の強い稚魚だけが川に留まり、そこで生き残るのです。つまり、海に出る稚魚は、生存競争に負けた負け犬（負け魚？）なのです。

しかし、海に出れば、川で暮らす以上に驚くほど多くの外敵が居ます。そこで生き抜いて大きく育ち、そして、そこで勝ち残ったものだけが再びふるさとの川を上ってくるのです。まさに敗者復活、

凱旋帰国です。そして、溪流の産卵場所には、自分を押しつけて餌を取り続け、海に落ちずに川に留まった、かつての勝者であるヤマメも居ます。しかし、川のような狭い場所ではなく広い海で揉まれて強く育ち、体も大きくなったサクラマスにヤマメが出会うと、ヤマメの方が逃げて行きます。サクラマスは、ヤマメを押しつけて一番産卵しやすい場所に産卵します。稚魚のときの立場が逆転したわけです。そして、メスのサクラマスが産卵し、オスのサクラマスがこれに精子をかけて受精させますが、体が小さくすばしっこいヤマメのオスも、ヤマメのメスが産んだ卵だけでなくサクラマスの卵にも精子をかけて子孫を残します。サクラマスは産卵すると死にますが、ヤマメは翌年も産卵して寿命を終えます。このようにして、サクラマスとヤマメは絶妙な仕組みによる棲み分けと分担によって強い子孫を残していくのです。

「このことは、私たちの人生において多くの教訓を与えてくれます。これは、「人間万事塞翁が馬」（にんげんばんじさいおうがうま）という故事の教訓と似たところがあります。これは、塞翁という老人の飼っていた馬が逃げたのですが、数ヶ月後にその馬が駿馬（立派な馬）を連れて帰ってきたので、その老人の子がその駿馬に乗ったところ、落馬して足の骨を折ってしまったことで兵役を免れて命拾いをしたという話です。人生において禍いと幸せとが転々として予測できない喩えであり、「禍福（かふく）は糾（あざな）は糾（あざな）える縄（なわ）の如（ごと）し」と同じ意味で説明されます。

しかし、このサクラマスの話から得られる教訓は、そんな単純なものではありません。勝者と敗者とが逆転することもあるのです、最後まで諦めてはならないという教訓だけでなく、もっと別の意味があるのです。

つまり、産卵にまで辿り着いたサクラマスもヤマメもどちらも勝者であるということです。川のヤマメも海のサクラマスも、産卵ま

で辿り着けたのは極少数なのです。大多数のヤマメとサクラマスは、稚魚から成魚になるまでの間に、川と海に居る外敵に襲われてほとんどが絶命しています。ですから、産卵場所で出会ったヤマメとサクラマスは、お互いに切磋琢磨して、ともに強い子孫を残すことができた勝者なのです。ヤマメとサクラマスとは、同種ですから敵対関係にはなく、強い子孫を残すために競い合った同志なのです。

この教訓こそ一番大事なものです。ですから、人生の本当の勝敗は、一人でも多くの強い子孫を残すことのできる強い生命力と、少しでも多くの人に感動と勇気を与える強い意志力によって、強い子孫と強い意志をこの世に残すことができるか否かで決まるのであり、わずかな立身出世や財産形成などの世俗的、刹那的なもので決まるものではないのです。

そんなことを思いながら、家族で鱒寿司を味わってみてください。